

# 先人たちのものづくりを探る

—出土品から見る先人の技術の粋—



石皿と磨石 (中妻貝塚出土)

鹿角製モリ (西方貝塚出土)

切断跡の残る鹿角  
(中妻貝塚出土)

縄文土器 (西方貝塚出土)

平成31年

**2月15日(金)~4月21日(日)**

時間 午前9時から午後5時まで(入館は4時30分まで)

休館日 月曜日(ただし、2月18日(月)は開館します)

## 開催にあたって

今回、第45回企画展「先人たちのものづくりを探る—出土品から見る先人の技術の粋—」を開催する運びとなりました。これも、日頃、当館の活動にご理解いただき、参加来館していただくみなさまのおかげと感謝申し上げます。

発掘調査では、先史時代の人びとが使用した様々な道具が出土します。それらは、土器や石器など、素材こそ現在とは違いますが、すでに多種多様な生活用品が使われていたことが伺えます。

現在、日本のものづくりは、そのち密さや精巧さが世界でも高く評価されています。今回の企画展では、手近に手に入る素材で様々な道具を生み出してきた先史時代の道具作りの技術を、出土した土器や石器などから掘り下げてゆきます。

先人たちの探求心や創意工夫の精神が、現在の日本人のものづくりに通ずるものを感じていただければ幸いです。

最後になりましたが、この企画展を開催するにあたり、多くの方々にご指導・ご協力を賜りましたことに感謝の意を表し、開催のあいさつとさせていただきます。

平成31年2月

取手市埋蔵文化財センター

### 考古学講座

#### 第1回「柏原遺跡と取手の旧石器時代」

日時 3月16日（土）午後2時～3時30分（開場1時30分）

会場 井野公民館 1階 会議室1・2・3

定員 90名（当日受付順、事前受付不要）

講師 埋蔵文化財センター職員

#### 第2回「縄文土器—土器づくりの技術—」

日時 3月30日（土）午後2時～3時30分（開場1時30分）

会場 井野公民館 1階 会議室1・2・3

定員 90名（当日受付順、事前受付不要）

講師 取手市埋蔵文化財センター職員

#### 第3回「出土品から探る縄文時代の狩猟・漁撈」

日時 4月13日（土）午後2時～3時30分（開場1時30分）

会場 井野公民館 1階 会議室1・2・3

定員 90名（当日受付順、事前受付不要）

講師 取手市埋蔵文化財センター職員

井野公民館（取手市井野2-17-17）

※駐車場の用意が限られています。

公共交通機関のご利用をお願いします。

### 展示説明

○午前11時と午後2時 2月17日、3月3・21・31日、4月14日 午前11時のみ 3月16・30日、4月13日

### 同時開催 取手の花嫁衣裳（取手宿ひなまつり参加企画）

会場 埋蔵文化財センター ロビー

会期 平成31年2月15日（金）から4月21日（日）まで

開催時間 午前9時から午後5時まで（入館は4時30分まで）

### 例言

1. このパンフレットは、平成31年2月15日から4月21日まで開催される第45回企画展「先人たちのものづくりを探る—出土品から見る先人の技術の粋—」に伴い発行されたものです。
2. この企画展の企画およびパンフレットの執筆は、当センター職員本橋弘美が担当し、その他職員の協力を得ました。

### 主な参考文献

『取手市史』原始古代（考古）史料編 取手市教育委員会 『中妻貝塚—発掘調査報告書—』取手市教育委員会  
古代史復元3『縄文人の道具』小林達夫編 『特別展 縄文土器の世界』松戸市立博物館 『第10回特別展 山野をかける土偶』上高津貝塚ふるさと歴史の広場 当センター企画展パンフレット 第7回「とりでを考古する」  
第12回「森の祈り 縄文人の心と文化」 第19回「Jは縄文のJ」 第24回「中妻貝塚の発掘」  
『茨城県教育財団文化財調査報告第143集取手都市計画事業下高井特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 東原遺跡 前畑遺跡 柏原遺跡』（財）茨城県教育財団



## 1. 狩りの道具を探る

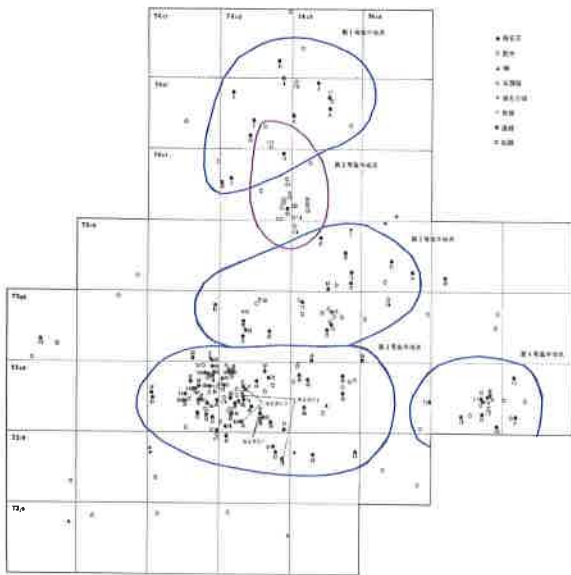
発掘調査では、多くの石器が出土しますが、それらの多くは、狩猟に使用されたものです。

石器は、現存している、人類が初めて加工し使用した道具です。日本では、日本に渡ってきた人類とともに石器がもたらされました。市内では、約2万5千年前頃の槍の頭である尖頭器が、大山遺跡（ゆめみ野）や東原遺跡（ゆめみ野）から出土しています。旧石器時代は、陸上の動物の狩猟を主な食糧源としたといわれており、動物の移動とともに、人びとも移動する生活をしていたといわれています。このような移動型の生活に、多くの石器や石器を作る石材を持ち歩くのは不便であったことは容易に想像できます。

そこで、およそ1万3千年前の旧石器時代終末期に登場するのが、細石刃という石器です。これは、石を薄く剥離して、柄に複数装着することで、槍の刃部分のみを石器で形成するための石器です。細石刃登場により、武器の軽量大型化に成功したわけです。

取手市では、旧石器時代の石器は複数の遺跡から発見されていますが、そこにとどまった痕跡は確認できず、唯一、そこにとどまり、石器を作成した石器製作跡が確認されている柏原遺跡（ゆめみ野）は、この細石刃を製作した製作跡の遺跡です。

そして、縄文時代に入り、狩猟の武器にも大きな変革が訪れます。<sup>やじり</sup> 鏃の登場です。それまで、槍状の武器により行われていた狩猟は、弓矢の登場で、一気に射程範囲が広がりました。氷河期であった旧石器時代から気候が変動した縄文時代、環境も大きく変わりました。獲物を獲得するため、多くの工夫を重ね、石器が発達していったことが伺われます。



柏原遺跡石器製作跡実測図（（公財）茨城県教育財団提供に加筆したものです）



柏原遺跡遠景（（公財）茨教育財団提供）



旧石器時代 尖頭器（左 大山遺跡出土 右 東原遺跡）



縄文時代 石鏃（中妻貝塚・神明遺跡出土）



旧石器時代 細石刃核と細石刃 (柏原遺跡出土)



旧石器時代 彫器 削器 (柏原遺跡出土)

## 2. 漁撈具をさぐる

旧石器時代の寒冷な気候から、縄文時代は徐々に温暖になり、縄文時代前期頃の約6500年から6000年前にピークを迎える縄文海進により、取手市域は小貝川流域の低地に広がる古鬼怒湾とそこに張り出した台地でした。

当時の人びとは、そのような気候の変動に伴い、食料の捕獲も変化していきました。寒冷期にいた大型の陸上の獲物が減っていき、海面が徐々に内陸に入り込んできたことから、水産物の捕獲に乗り出します。

その際に使われた道具は、主に鹿角や鹿やイノシシなどの骨を利用した骨角器です。この骨角器の登場は、縄文時代を代表する道具である磨製石器の登場と少なからず関係があります。縄文時代に入ると、人びとは研磨して道具を作る技術を取得します。その代表的な製品は磨製石器ですが、骨角器のほとんどが研磨によって加工・仕上げされ造られたものなのです。

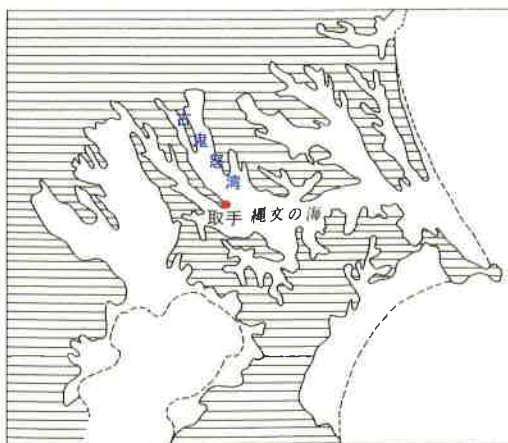
大型魚や海獣類などを捕獲するために利用されたのが、モリやヤス、釣り針です。主に鹿の角により作られた骨角器です。鹿は、縄文時代の主要な動物性の食糧であり、鹿の角は毎年生え変わるため、定期的に採集できる貴重な素材だったと思われ、貝塚からは多くの鹿の骨角が出土します。縄文人は、これを無駄なく道具に再利用したのです。

また、獲物をより確実に確保するための工夫をされた「かえし」を付けたモリは、縄文時代中期ごろから登場しました。市内の縄文時代の遺跡からも多くの鹿角製のモリやヤスが出土しています。中期を中心に発達した西方貝塚 (小文間) や後期から晩期中妻貝塚 (小文間) からは、かえしのついた鹿角製のモリも出土しています。

また、再利用されたのは、鹿だけではなく、エイの尾棘は、天然のかえしがついており、側面がギザギザしています。縄文人はこれを上手に再利用し、刺突具としたのです。

魚類の漁は、網漁によっても行われました。遺跡からは、土器の破片を四角く整形し、中心にくぼみを付けた土器片錘が出土することがあります。これは網の重りに使われたと考えられています。これも破損した土器を利用したと思われま

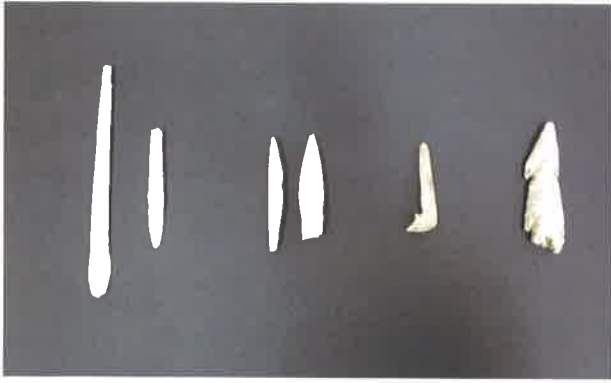
す。縄文時代、日本人は、まだ金属を利用するすべを持っていませんでしたが、身近にあるものを無駄なく、非常に上手に再利用していたことが分かります。



縄文時代の海岸線復元図 (『取手市史』原始古代 (考古) 史料編より)



切断痕の残る鹿角 (中妻貝塚出土)



西方貝塚から出土した骨角器



中妻貝塚から出土した骨角器

### 3. 土器づくり

人類の技術の大きな変革期のひとつが土器の登場だと言えます。土器の登場は、気候の変化と無関係ではないでしょう。それまでの狩猟による移動型の生活から、気候が温暖化し、大型の獲物がいなくなり、一方、木の実が採集できる広葉樹が茂り、豊かな内湾が台地の奥部まで入り込んでいきます。これらの木の实や貝類を食するためには、茹でたり煮たりする調理が最適です。

およそ1万2千年ほど前に最初に登場した土器は、煮炊きに使われるために作られ、出土するものは火を受けてすずや焦げ付きがついていたりします。煮炊き用に作られた縄文時代草創期から早期の土器は、深鉢型で丸底や尖底となっていることが特徴です。温度を早く上げるための効率的な工夫と言えます。市内では、大渡遺跡（野々井）の縄文時代早期の土器が現在最も古い土器となります。出現当初の縄文土器は、その名のとおりに縄目が全体に施されたものや、貝殻で条痕を施したものなど、単純な装飾にとどまっています。

そして、この地域の早期から前期への縄文土器の変遷の特徴は、底部が平底になり、繊維土器が現れることです。繊維土器とは、土器の胎土に植物性の繊維を混ぜて焼き上げた土器で、繊維を混ぜることによって、土器製作時の乾燥や焼き上げる時の破損を防ぐためだったと考えられています。また、前期になると浅鉢などの新形式が出現します。土器の用途に分化が起こったことが伺われます。



縄文時代早期の土器片（大渡遺跡出土）

関東地方では、前期中葉から文様施文具として、半裁した竹管やヘラが使用され始めます。この施文具の変化が、器面装飾を発達させた契機となり、中期には、火炎土器に代表される粘土ヒモを貼り付ける隆帯文や大型の把手によって非常に立体的な装飾を施した土器が出現します。これらは、骨を納めて埋葬に使われることもあります。貯蔵や煮炊きのような実用に使われた跡が残るものもあり、日常に使われていたと思われます。

中期になると、土器の器形も増え、特に勝坂式の土器は器台型土器や壺型土器、有孔罎付き土器などが作られます。市内の西方貝塚からは、同時期の有孔罎付き土器が出土しています。

さらに、後期・晩期になると各遺跡から出土する土器の器形が飛躍的に豊富になります。浅鉢や壺型土器のほか、液体を注ぐ口が付いた注口土器や香炉型土器など、様々な器形が出土します。これは、技術的に進歩しただけではなく、土器の用途が細かく限定されたことを意味していると思われます。この時期は、土偶など、呪術や祭祀に関連していると考えられる道具類が発達する時期と重なります。土器に関しても、日用品とは別に、祭祀用の特別な器が用意され、使われていたと考えられます。

後期から晩期のこの地域での土器の特徴は、土器の模様を区画に分け、区画外は縄文を施さない磨消縄文を施すことです。また、土器の厚みが薄くなり、表面をつやが出るほどきれいに磨いているのも特徴です。

また、縄文時代も終焉に向かう縄文時代後・晩期には、非常に薄く、無文の土器が出土する場合があります。この土器は、強い火を受け、剥離して破片になっていることが多く、製塩のために海水を煮詰めた土器と考えられています。市内でも、中妻貝塚と神明遺跡（上高井）から、無文の薄い製塩土器が出土しています。

このように、1万年もの長い間続く縄文時代には、その豊かな縄文文化が成熟するに伴い、土器も煮炊き用の日用品から、文化を象徴する祭祀用具まで、その用途に応じ、さまざまに進歩していったのです。縄文土器は、日用品でありながら、縄文人のものづくりの並々ならぬこだわりが詰まった先人の遺物と言えます。



西方貝塚出土 中期 深鉢型土器



西方貝塚出土 中期 深鉢型土器



西方貝塚出土 中期 有孔罎付き土器



中妻貝塚出土 後期 浅鉢型土器



中妻貝塚出土 後期 深鉢型土器





中妻貝塚出土 後期 深鉢型土器



中妻貝塚出土 後期 注口土器



神明遺跡出土 晩期 深鉢型土器



中妻貝塚出土 後期 製塩土器

#### 4. 調理に使われた道具

石器には、狩猟・漁撈のために使われたものばかりでなく、穴を掘ったり、道具の細工や調理に使われたものも出土します。

市之代古墳群の発掘調査で、約3万年前の礫器と打製石斧が出土しています。これは、市内では最古の石器で、こぶし大の自然石の側面を打ち割って加工し、穴を掘るために使われた石器だと考えられています。

縄文時代に入り、今までの石材を割ることによって加工する打製石器だけでなく、研磨して刃部を細工する磨製石器が登場します。研磨の技術は、道具の種類を飛躍的に広げました。打ち割っただけの打製石器は、刃部に凹凸があり、鋭い反面、力が不均等にかかり、もろいという欠点がありますが、研磨により仕上げることで、丈夫な道具が手に入ったのです。

先述した骨角器の発達も研磨技術によるものです。また、研磨の技術は、木材や木器の加工・仕上げにも用いられたと考えられています。

磨製石器の代表的な磨製石斧は、木を伐採したり加工するために使われていました。また、磨製石器のひとつの、石皿や握りやすく研磨成形された磨り石・たたき石は、木の実の殻を割ったり、その木の実を磨り潰すために使用された調理器具です。中妻貝塚からは、低い脚部が4つ付いた裏表丁寧形成された石皿が出土しています。



市之代古墳群出土 旧石器時代 打製石斧 礫器



中妻貝塚出土 石皿と磨り石

## 5. 祈りの道具

縄文時代の遺跡からは、日用品とは考え難い石棒や土偶などが出土することがあります。これらは、当時の人びとの精神的な支柱となる祭祀に使用されていたと考えられています。

祭祀に使用されたと考えられている石器は、石棒や石剣・石刀などがあります。

石棒は関東地方では中期から後期に見られる、男性を象徴したと考えられている祭祀具です。市内でも中期の西方貝塚の住居の柱穴に、埋められたように欠損した石棒が出土しています。西方貝塚の石棒は、全体に彫刻が施された古い段階の石棒です。

また、縄文時代の祭祀用具の代表的なものとして、女性を表したと考えられている土偶があります。土偶は、縄文時代早期から登場しますが、一度中期にその存在が途切れれます。時を経て、後期になると一気に多数の土偶が出土します。これは、土器の器形も、注口土器や香炉型土器など、日用的に使われたとは思われない道具の出現に重なります。

縄文時代の人びとはどのような祭祀を行っていたのでしょうか。その出土品からは全容を探ることはできませんが、同じ縄文時代においても、その時期によって、祭祀に用いる道具に変遷のあることが分かります。長く続いた縄文時代、人びとは何に祈り、何を願ったのでしょうか。

市内からも、後期中妻貝塚や神明遺跡から、多くの土偶の一部が出土しています。



西方貝塚出土 石棒



中妻貝塚出土 土偶



神明遺跡出土 土偶